

開高健

知的な痴的な教養講座

雄

staff

photographer 立木義浩

copy editor 菊谷匡祐

book designer 江島 任

知的な痴的な教養講座

一九九〇年三月一〇日 第一刷発行
一九九〇年四月二五日 第四刷発行

著 者 開高 健

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

一〇一・一五〇 東京都千代田区一ツ橋二一五 一〇
電話 編集部 (03)・(03)・一六三七・

販売部 (03)・(03)・一六三九・
製作課 (03)・(03)・一六〇八・

印刷所 大日本印刷株式会社

© 1990 T.KAIKO

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。落丁、乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。

開 高 健

知的な痴的な教養講座

集英社

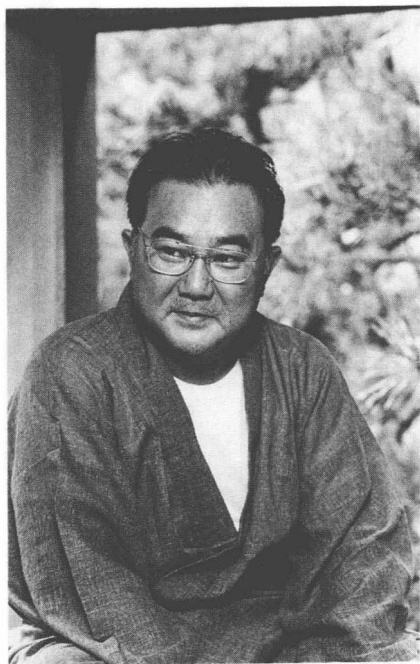
目次

第一章	小さな死	7
第二章	ジヨルジュVの廊下	13
第三章	馬馬虎虎	19
第四章	遇客婚	24
第五章	カルマ	31
第六章	風が吹けば桶屋がもうかる	36
第七章	変態	41
第八章	コールド・ターキー	47
第九章	石斑魚	53
第十章	地獄	59
第十一章	ピジョン・イングリッシュ	64
第十二章	隣の畑	70

第十三章	王様の服	76
第十四章	ビギナーズ・ラック	83
第十五章	ノブレス・オブリージユ	88
第十六章	宗教は阿片か	94
第十七章	『旅情』	101
第十八章	シンゲル・モルト・ウイスキー	107
第十九章	潮吹き	112
第二十章	輪廻	118
第二十一章	ゴッドとサル	123
第二十二章	人類は滅亡する	129
第二十三章	シャンゼリゼのマクドナルド	134
第二十四章	落ちた偶像	140
第二十五章	アニミズムと北斎	146

第二十六章	コモン・センス	151
第二十七章	潮吹き(補遺)	156
第二十八章	歴史の振り子はどっちに振れる？	162
第二十九章	英雄は色を好むか	167
第三十章	コラム	173
第三十一章	ワインのなかの二人の女	178
第三十二章	職業としての文学	184
第三十三章	ブルジョワ	190
第三十四章	CMとヒトラー	196
第三十五章	クラフトマン・シップ	201
第三十六章	究極のスーツは紺色	207
第三十七章	世紀末	212
第三十八章	戦場の『七年目の浮気』	218

第三十九章	ライスワイン	223
第四十章	ピョートル大帝	229
第四十一章	香水	235
第四十二章	内臓料理	240
第四十三章	リンの玉	246
第四十四章	意馬心猿	251
第四十五章	目には目、歯には歯	257
第四十六章	先祖たちのしやれた言葉	263
第四十七章	幻のホー・チーミン	269
第四十八章	歴史は連鎖する	274
第四十九章	魚心あれば	280
第五十章	リンの玉異聞	286



第一章——小さな死

恋人であろうが、夫婦であろうが、男女はいたす。今夜も、いたす。明日も、いたす。汗みどろになって闘いあい、夜更けにパタリ、時間がとまる。男が女の体からおりる。そうすると、男女ともに短いけれど深い、完璧な眠りに襲われる。

これを、その道の達人であるフランス人たちは、「小さな死」と呼ぶようになった。なかなかうまく命名であつて、さすが色道の達人だけのことはある——と、感心させられる。

ところが、フランス人であれ日本人であれ、共通していることがひとつある。「小さな死」の眠りに入ると、女はただひたすらに眠りつづけるが、男の方はしばらくすると、もぞもぞと立ちあがつてトイレにいつてみたり、まどを開けて空を眺めて

みたり、週刊誌を読んだり、活動を開始する。「小さな死」からすぐに復活するのである。

この現象は、およそ次のように説明づけられる。つまり、石器時代の人類が朝となく夜となく危険にさらされていた頃の情報遺伝が、いまだにそのまま伝わっているのではないか——という学説である。

男は、いつまでもウツツをぬかしていられない。外敵がいつ襲ってくるかわからない。クマがくるかもしれない、オオカミがやってくるかもしれない、悪魔が姿を現すかもしれないのである。敵は前後左右、至るところにいた。したがって、快樂の後の甘き眠りにいつまでも身をゆだねているわけにはいかない。早く目を覚まし、防衛態勢をとっておかねばならないから、すぐにもぞもぞしはじめるのである。

一方、女は受胎して、妊娠して、子供を産まねばならない。そのためには、ぐっ

すり眠りこんで苗床を静かに放置しておく必要がある。そのために、女は失神して——あるいは半失神して、前後不覚にあれほどぐっすり深い眠りにおちていく。自然があたえてくれた生理なのだ。

この男女の生理の違いについて、もっと素朴な海岸地帯の田舎では、

男は丸干しじゃけん

女は開きじゃけん

乾きの速さが違うんよ

と、漁師たちは説明している。

さて、どっちの学説をとるか、諸君は今晚もためしてみればよろしい。

「先生、質問あり。『小さな死』といわれましたが、これは絶頂の女が『死ぬ、死ぬ』というのと、何か関係があるんでしょうか？」

なるほど、いい質問であるな。が、関係はなからう。偶然の一致である。

「小さな死」はフランス語の *petite mort* 死ほど完璧な眠りではないが、情事の後
の眠りはそれにつぐほど完璧に近いから、小さな死と呼ぶわけである。

だが、女がベッドで「死ぬ、死ぬ」と上ずった声で喘いだり叫んだりしたからと
いって、必ずしも眠りたいといってるわけではない。怒涛の襲ってくる絶頂感の中
で、意識が遠くなっていくような感覚を「死ぬ」と形容しているのであろう。

とはいうものの、世間で一般にいわれるほど、女はベッドで「死ぬ、死ぬ」とい
う例は多くない。色道の識者に確かめて、そのようである。圧倒的に多いのが、日
本においては「行く」であり、欧米では「来る」であるらしい。

セックスの絶頂感は、海の大い潮のイメージである。潮に乗せられて運びさら
れていく感覚が、海の潮がドツと押し寄せてくるといふ感覚が——なのである。これ
をアジアで「行く」といい、西洋では「来る」といった。キップリングは「西と東、

ついに相合うことなかるべし East meets never West」といったが、行くと来るとでは大違いにもせよ、海のおおきな潮に乗って、ゆさぶられた後ではいずれにしても、果てる。果ててぐっすり眠りこむ。この点では、東も西も同じである。東と西は「小さな死」の中で邂逅するわけである。

もちろん、ひとりひとりの女がそれぞれ違った絶頂感を感じるのだろうとは思ふよ、わたしも。奈落の底に落ちる人がいるだろうし、空高く舞いあがる人だってあるに違いない。中には、何も感じない女だっているくらいなんだから。

しかし、古今東西、性の絶頂に達する女 of 感覚を表現した記述を読むかぎり、人類の女は海の潮にゆさぶられる——というのが、もつとも適切な形容だといえる。とすると、ひょっとしてこのもつとも個人的、もつとも深奥なる感覚は、人類の先祖の生物が海の中で暮らしていたときの、過去の情報遺伝ではないか。であるならば、イクも、クルも、シヌも、ことごとく蒼暗の海冥、劫初よりの信号音なので

ある。

そう考えると、いささか符合する事実があるな。人間の血液がしょっぱい。汗はもちろん、精液もちょっとしょっぱい。小便もしょっぱい。女の愛液もはんなりとしょっぱいんだ。これは、人間が海から上がってきた証拠じゃないのかな。人間の中には、海があるんだ。海が生きているんだ。人間われら、みな海の子なのである。何なら今夜、愛液と精液を指ささでちょっと舐めてごらんよ。

といいながら小生は立ちもせず、死にもせず、ただ座っている。

南無阿彌陀佛。

【丸干し／開き】 説明するのもヤボだが、男女の十二の形状をあますところなく表現した、庶民の知恵である。丸干しも開きも、イワシ大のものあり、タイ級もありと、大小はさまざま。

【愛液】 男が射出する精液の量は、おおむね3ccぐらいで個人差はあまりないが、女の愛液の分泌は極端に異なる。出ない者さえいるし、泉のごとくに湧出する者もある。愛液の出ない女とやるときは、挿入がスムーズにいかない点に注意が肝要。

第二章——ジオルジュVの廊下

サハラ砂漠で黒人の若い男が死にそうになっていた。「おお、神様、どうかお助けください」と祈ったが、神は救いにきてくれない。「だれでもいいから、助けてくれ！」と、声にならない叫びをあげると、にわかにヒュードロンドロンと悪魔が硫黄の匂いとともに現れて、「おい、ヤング、オイラは神じゃねえんだから、お前の命を救うわけにはいかん。命を救っちゃあ、悪魔家業やつてらんねえもんな。だから、結局、お前は死ぬつきやないわけよ。しかしダ、命を助ける以外だったら、この際お前の願いを三つ叶えてやるぜ。オイラのお家芸さ。何かあったらいつてみな」それで黒人の男がいった。「まず、ボクは水のあるところへいきたい。それから、一度だけでも色が白くなりたい。それから、死ぬまえに女のあるところが拝みたい」すると悪魔

が笑って「よっしや、叶えてやらあ」といって、指をパチンと鳴らした。と、次の瞬間、その黒人の若者は、パリのジョルジュVホテルのビデになっていた。

ある男から聞いたジョークである。

本来、ジョークというものは、絵解きをしてはいけないことになっている。落語のオチに解説をつけないのと、同じである。しかし、この際は、いささかの注が必要かもしれない。

ジョルジュVはパリにある超高級ホテルだが、これはまあいいとして、問題はビデである。ビデがどんなものかわからないと、このジョークは成立しないからである。

気候風土にもよるのだろうが、ヨーロッパの女は（女だけじゃなくて男もだが）、あまり風呂に入らない。風呂に入らないと、あそこがくさくなる。殊に白人種は体臭がきついから、くささも強烈である。はじめはせいぜいブルーチーズぐらいの匂いだが、日がたつにつれて酸酵臭がくわり、クサヤの干物をやっているような異

臭になる。こういう匂いもすきなやつもいるが（わたしもそう嫌いではない）、たい
ていは鼻をつまんで逃げだすから、ヨーロッパの女は風呂に入らなくても、あそこ
だけはしょっちゅう洗う。ビデは女があそこをあらうためのもので、便器と同じく
ふつうは白い陶器でつくり、卵型をしていて、底が浅く、底のまん中に湯と水が噴
出する蛇口がついている。わが国の明治生まれの仏文学者たちはこれを「洗マン器
と呼んだ。ヨーロッパのホテルには、風呂がなくてシャワーだけのところも多いが、
どんなチンケなホテルでもビデだけは必ずついている。日本人観光客が、間違えて
ビデで顔を洗ったりするという、笑えない喜劇もしばしば発生しているそうだから、
諸君もヨーロッパへいくときは、気をつけていただきたい。

さて、黒人の若者は、ジオルジュVホテルのビデに変身して、三つの願いが叶つ
た——水があつて、色は白く、かつ女のあるところが拝めるところなのだから。なかなか
よくできたジヨークである。